

会長就任にあたって

国立環境研究所生物圏環境部／微生物系統保存施設
渡 辺 信

本年6月の総会において、本学会会長を拝命しました。歴代の会長の先生方は、微生物系統保存事業のみならず、微生物分類学の分野、さらに広範な微生物学の研究分野において多大な実績と経験をもたれておられた著名な方々でした。私の非力、非才は比較するまでもなく明らかですが、来年(1998年)の3月にやっと50歳になるという若さだけがとりえだろうと思っております。

顧みますと、本会の前身は1951年に世界最初の保存機関の連盟として結成された日本微生物株保存機関連盟でした。その後1974年に日本微生物株保存連盟と改称されて、個人会員が参加するようになりました。1988年につくば市で開催された昭和63年度日本微生物株保存連盟総会において「'90年代のカルチャーコレクション—そのあるべき姿—」という課題で、さらに翌年大阪での総会で、「これからのカルチャーコレクションの役割と学問的評価」という課題でシンポジウムを行い、会員同志の活発な討論を行いました。1993年には、今までの討論を踏まえて、時代の要請およびこれからの時代を先取りしようという積極的な会員の意志が集約した結果として、日本微生物資源学会と改称されました。1992年にブラジルの地球サミットで「生物多様性条約」が採択され、わが国を含む157カ国が署名しましたが、地球生態系での微生物の役割は経済的資源として、さらに生態系の恒常性を保証するためにはならぬ存在であることは世界の共通の認識となっております。ここにいたり、カルチャーコレクションは人類の貴重な資源としての微生物について、それらの調査と保全および有効利用を推進するために必須の分野となってきました。このような時期を先取りして、日本微生物株保存連盟を日本微生物資源学会として発展させた会員の方々の先見性と意志はすばらしいものであったといえましょう。これからのカルチャーコレクションの新しい概念はみごとに「日本微生物資源学会」として集大成されたといえます。なお、日本微生物資源学会の新たな概念につきましては、中瀬前会長の高著(日本微生物資源学会第9巻2号:61-62)に紹介されております。私がなすべきことはただ1つ、新しい概念の完成にむけて必要なことをひとつひとつ着実に実施していくことであると思っております。

1993年に日本微生物資源学会と改称してからの4年間の中瀬前会長を中心にして、学会の組織を機能的なものとししました。また、カルチャーコレクション事業を推進してきた会員のりっぱな活動の成果に対して、学会として2つの学会賞が設けられ、本年、最初の「日本微生物資源学会技術賞」が授与されました。文部省の公開シンポジウムの経費も1995年度、1997年度と隔年で認められており、社会人、大学生相手の啓蒙活動も実施しております。雨後の竹の子のように多くの学会ができていなかで、会員が300名ならずという小さい学会ながらも、地道で、活発で、意味のある活動を実施してきたと思います。事実、本学会は小さいけれどもきわめて重要な学会であるという評価をよく耳にするようになりました。

日本微生物資源学会において、これからの数年間の検討課題としては、会員数の増大はもちろんとして、各保存機関の充実(インフラストラクチャー、経費、人材等)および保存機関間のネットワークの向上と充実に向けて学会としてやらなければならないことを明確にし、かつ実施し、それらの実現にむけて何らかの道筋を作ること、さらに個人会員の活動の活性化にむけて積極的な活動を行っていくことであろうと思っております。とにかく、微力ながら最善を尽くす所存でありますので、宜しくお願い申し上げます。